

絵本作家さとうわきこ研究 ～ 童話作家から絵本作家へ

田 中 愛

はじめに

絵本「ばばばあちゃん」や「せんたくかあちゃん」のシリーズで知られるさとうわきこ氏は、1968年「母の友」（福音館書店）に童話が掲載されて以来、45年以上の長きにわたって創作を続けている現役の絵本作家である。

現在は長野県岡谷市に住み、創作のかたわら、岡谷市と原村に開設した「小さな絵本美術館」の主宰として、自身の絵本原画のほか国内外の作家の原画を展示・紹介している。原画や資料を借り受けるため海外に幾度も足を運び、また学校や図書館等に乞われて講演のため日本全国を飛び回るなど、精力的な活動を行っている。

信州豊南短期大学は、岡谷市から南に十数キロ下った場所にあり、2013年に言語コミュニケーション学科2年生のゼミ研究の一環として、さとうわきこ氏にインタビューをお願いしたところ、快くお受けいただけ、以後何度か貴重なお話をうかがうことができた。この論では、わきこ氏が長野県に移って来られるまでをたどりながら、どのように絵本作家になり、人気シリーズ「ばばばあちゃん」や「せんたくかあちゃん」を生みだすに至ったかを考察してみたい。また、挿絵作家として活動していた頃から数えて50年にわたる著作の一覧を、ゼミ学生の協力も得て作成した。

*

さとうわきこ（本名：佐藤和貴子）は、1937年（昭和12年）1月28日に、東京市大井町（現東京都品川区）に生まれた。父孝延・母節子の第2子であり、

5つ上に姉せい子がいる。和貴子という名前は、毎日新聞社社会部の記者であった父の上司の命名による。聖徳太子の憲法十七条「和を以て貴しとなす」にちなんで名づけられた。

姉が健康優良児であったのに対し、わきこは痩せており風邪をひきやすく、ぜんそくを持っていたようでよく咳き込んでいた。姉から「こんこん」「風邪のかみ」などあだ名をつけられたりもしていた。(注1)

当時、家には母方の従妹が寄宿して女学校に通っており、姉がよく本を読んでもらっていたが、幼いわきこもそばで一緒に聞いていた。中でも、新潮社の『世界名作選』(注2)のことはよく覚えているという。たくさん読んでもらった童話や詩の中でも「特にロバート・フロストの『牧場』(阿部知二／訳)は私の根幹となっている大好きな詩です。」(注3)と述べている。

「牧 場」

牧場の泉を掃除しに行ってくるよ。

ちょっと落葉をかきのけるだけだ。

(でも水が澄むまで見てるかもしれない)

すぐ帰ってくるんだから——君も来たまえ。

小牛をつかまえに行ってくるよ。

お母牛のそばに立ってるんだがまだ赤ん坊で

お母牛が舌でなめるとよろけるんだよ。

すぐ帰ってくるんだから——君も来たまえ。(注4)

2連8行の短い詩だが、「牧場」「泉」「落葉」といった美しい自然をイメージさせる言葉が並ぶ1連と、「母牛」が「小牛」を慈しむ様子を描いた2連とで構成され、秋の牧場の情景を印象深く描き出している。そして、詩全体が語

りかけの言葉になっているため、読者は詩の世界の中におのずと誘い込まれ、その場に立ち会っているような気持になる。「すぐ帰ってくるんだから——君も来たまえ」という呼びかけがリフレインされているのも心地よい。まだ字の読めない頃から、わきこはこうした良質な日本語に多く触れており、言葉の持つ語感の面白さを楽しみ、また豊かなイメージを広げていた。

一方、ラジオをよく聞いていたという。両親ともに落語が好きで、母親は家事をしながら落語や漫才を流していた。わきこも落語好きになり、父親に連れられて寄席にも行っていたという。リズムのよい軽妙な落語の語り口は耳に快く、わきこの言語感覚を刺激したに違いない。さらに、わきこの絵本の特徴ともいえる江戸小咄風のユーモアの感覚も、幼いころから身につけていったものであった。

6歳のとき、わきこは結核性の肺門リンパ腺炎を発症し咯血する。その夏に、わきこの療養のため、一家は大井町から練馬区東大泉町に移り住んだ。当時は武蔵野の自然が残っており、分譲された土地に最初に建った家だったという。隣には林があり、田んぼや麦畑が広がり、あちこちに湧いている水には沢がにや川えび、めだかがいて、たくさんの鳥も住んでいた。

東京の郊外と云われていた頃の練馬のはずれに、私の家はあった。(略)家は高台にあって、下っていくと田んぼがあり、いつも水が湧き出ている小川がたくさんあった。私の家からそれらの風景は、いつでも見られた。(略)一面の田んぼと、絶えず湧く水源を持つ沼があった。それらは平地林のすそにあたり、林の奥にあたりで、湧水の絶えることは無かった。時々鳥のせきれいが、美しい羽を休めてとまっていたりする。霧でもやったような朝はやく、父は丘の上で手を叩いた。パンパンパンと森に反響して、いっせいに鳥が飛び立った。(注5)

この美しい土地をわきこは大好きになったという。そして、武蔵野の豊かな自然は、徐々にわきこを元気にしてくれただけでなく、わきこの原風景となったのであった。(注6)

父親は、わきこがあまり体が丈夫でなく結核も患ったことから、長生きはできないだろうと思ってわきこを大変かわいがったという。「一緒に屋根に上って星を見たり、庭にゴザを敷いてごはんを食べたり、やきいもを焼いたり、まるでばばあちゃんのように遊んでくれ」^(注7)た。また、わきこを伴って武蔵野の野山を散策し、持参した牧野富太郎^(注8)の植物図鑑を見ながら、色々なことを教えてくれた。わきこは植物に詳しくなると同時に、ものをじっくり見たり、聞いたり、体で感じたりという体験を積み重ねることができるようになったという。文芸好きの父親はまた、宮沢賢治の『注文の多い料理店』や『古事記』『今昔物語』など、本をよく読んでくれた。これをきっかけに、わきこは賢治の作品が大好きになったという。

父は武蔵野の自然がすきだったので『かしわばやしのよる』という話を、よくしてくれました。『うこんしゃっぽのかんからかんのかあん』とか、賢治の言葉には独特の言い回しがあるでしょう。私はそういう言葉が大好きだったんですよ。^(注9)

童話の中の、リズムのある美しい響きを持った言葉たちは、目の前に広がる武蔵野の自然と一体となり、わきこの中に溶け込んでいった。

東京学芸大学附属大泉小学校に通っていたわきこであったが、体調のすぐれないことも多く、学校を休みがちであった。算数など勉強に遅れをとっているという劣等感がいつもあり、詩を書くようになったという。国語の教師や教育実習生にノートに書いた詩を持参し、見てもらっていたが、小学校3年生のとき、実習生に詩を褒められ、書き続けるよう言われた。わきこは大変うれしく、その後も詩作を続けていった。やがて高校時代から童話を書くようになるが、詩作を継続したことで文章を書く癖がついたのだという。^(注10)

しかし、わきこはおとなしい子どもではけしてなかった。結核が治り、体が丈夫になってくると、自然の中で真っ黒になって遅くまで遊んでいた。

缶ケリしたり近所中の子どもたちとワアワア言って遊んで真っ黒になって帰ってきて、夕日が沈む頃になると裏にあった樫の木をよじ登って、そこか

ら屋根に飛び移って…周りにはなんにもない平原みたいなもんですから、屋根の頂点にまたがって夕日が沈むのをしょっちゅう見てたの。(注11)

友達は男の子ばかりで、色々ないたずらや、芝生に火をつけるといった危ない遊びもしていたという。「ばばあちゃん」を彷彿とさせる豪快な遊びっぷりである。病弱な面はあるものの、生命力にあふれたパワフルな子どもであった。武蔵野の自然という広大な遊び場を得て、日焼けしながら思い切り遊んだ体験が、やがて童話や絵本の中に活かされていくことになる。

付属中学に進学すると、百人一首に凝り、遅くまで友達とカルタ取りをしていたという。歌の意味はよくわからないが、上の句を聞くと即座に下の句が出たといい、この時期にも洗練された言語の蓄積があった。わきこが3年生のとき、たくさんの愛情を注いでくれた父親が肺結核で亡くなる。尊敬する大好きな父を失い、寂しい思いをしたという。しかし、亡くなるまでに父親は、わきこに多くのものを与えた。それがわきこの根幹を作ったといえるだろう。「私の中で父親とのスキンシップは偉大なものがありました。今の私の基になっていると思う」(注12)と、わきこは父の影響の大きさを後年振り返っている。

東京都立大泉高校に進学したわきこは、美術教師でもあった担任の先生から絵を褒められたことがきっかけで美術部に入部する。デッサンをしたり油絵を描いたりする中で、将来油絵の画家になりたいと思うようになる。一方、絵を描いたり、童話を書くようになっていたが、「趣味的なもの」で、それが仕事になるとは思ってもいなかった。(注13)

進路を考えるにあたり、担任の美術教師の出身校である東京教育大学教育学部の芸術学科構成専攻に進学したいと思ったというが、構成専攻は油絵を教えるのではなく、ビジュアルデザインを研究するところであった。(注14) 父を亡くし一家は困窮しており、母親が大変苦勞しているのを目の当たりにしていたわきこは、女性でも手に職がなければ、と思っていた。そこで、デザインのスキルを身に付け、収入を得ることを考えたのだった。しかし、経済的に余裕はなく、進学することはかなわなかった。

そこで、1年間働いて学費を貯めてから大学に進もうと考え、高校卒業後は有楽町にあった映画製作会社「東宝」の社内診療所で受付のアルバイトをしていた。しかし、1年もしないうちに腎臓結核を発病する。「つらくて、死にたかった。何度も線路を見てたりしたのよ」と振り返る。しかし、順天堂大学で右の腎臓を摘出する3時間の大手術を受けたとき、直後にわきこは気丈にも摘出した腎臓を見たいと医者に願い出て、まっぶたつに割った腎臓の病巣も見たという。わきこは自分のことを「弱いけれど、開き直ったらとても強くなる」と述べているが、そうした性質をよく表しているエピソードであろう。術後は北区滝野川の結核療養所に移り、約2年の療養生活を送ることになる。

療養所を出てからは、日本橋高島屋や西武デパートの販売員など色々な仕事をしていたが、好きな絵の関係で生計を立てたいという思いは強かった。そこで、病気休職中であった東京教育大学美術学科教授の高橋正人を、高校時代の先生から紹介してもらい、仕事が終わってからデザインを教えてもらった。「当時の私は、お金を得る美術関係の仕事といえばデザインしかないと思っていました。そこでレタリングや線の引き方など、デザインの基礎を習ったのです」(注15)と述べている。大学進学は諦めたものの、希望していた構成専攻の教授高橋に乞うて学ぶという行動力は、好きなことを仕事にしたいという熱意と、病で行動を制限されてきたからこそ何にでも挑戦して実行しようという気持ちゆえのものであったろう。(注16)

1年後、わきこはデザイン会社松文堂印刷のデザインルームに就職する。女性はひとりしかいず、仕事もつまらなかったという。しかし、ここで『ぞうのたまごのたまごやき』などの「王さまシリーズ」で知られる寺村輝夫との出会いがあり、絵本の世界へと進む契機をつかむことになる。

当時、児童書出版社の三十書房に勤めていた童話作家寺村輝夫から、松文堂へ音楽教室の雑誌の表紙や挿絵の依頼があり、わきこは初めてイラストを担当することになった。この仕事で絵を描いているうちに、子どものためのイラストレーションの仕事に興味を持つようになる。そしてここでもまた、わきこの

行動力が道を拓いていく。

依頼されたイラストを仕上げ、担当者の寺村に届けに行ったとき、思わずこう尋ねていた。「細かい絵を描くのが面白い。雑誌以外の場で絵を描く仕事はないでしょうか」。「寺村さんは『やりゃいいじゃねえか。いっぱい描いて持ってこい。スケッチブックいっぱい、ぎっしり描くんだぞ』と言ってくれました。そのときは本当に持ってくるとは思っていらっしやらなかったでしょうけどね」。(註17)

わきこがスケッチブックのすべてのページに絵を描き持っていくと、寺村は子どもの本を扱う出版社を紹介してくれ、紹介状も書いてくれた。「子どもが盲目的に好きだったので、うれしかったですね」(註18)とその時のことを振り返っている。わきこはスケッチブックと紹介状を携えて出版社を回り、チャイルド本社やフレーベル館、小学館や学研などに絵を提供することができるようになる。また寺村は「王さまシリーズ」の初期の1冊に絵を描かせてくれたという。(註19) わきこは勉強のためもあって福音館書店の絵本雑誌「こどものとも」を購入して読むようになっていたが、以前から大好きな絵本であった『がんばれさるのさらんくん』(中川正文作・長新太画「こどものとも」1958・3)のような絵本を書くことが夢になった。そして『さらんくん』も掲載された「こどものとも」に、自分の絵本を載せたいと思うようになったのであった。

絵の仕事が入るようになった頃、松文堂印刷を退職し、昭和40年に同じ会社でデザイナーをしていた松島氏と結婚する。(作品一覧の1965年から1969年の筆名が「松島わきこ」となっているのはこのためである)

この頃から、紙芝居・児童文学作家で宮沢賢治の研究家としても知られる堀尾青史が主宰する、童話研究会の同人誌「ピリカメノコ」(アイヌ語でかわいい女の子、の意味。渋谷区の幼稚園の先生たちが同人)に参加するようになる。書いたものが堀尾に評価され、かわいがられたわきこは次々とこの同人誌に童話を書いてきた。さらに、絵本を描きたいと思っていたわきこは「どうしても福音館にコネが欲しくて『母の友』に童話の投稿をした」(註20)という。

「ピリカメノコ」はやがて解散するが、その後も同人だったふたりの女性と習作を重ねていた。そのうちのひとりが福音館書店の本の挿絵を描いていたので紹介を頼み、自作の絵本を売り込みに行った。すると以前投稿していた童話を、編集の水口氏が覚えていてくれ、面白いということで「母の友」に「てんぐのきせる」（1968年9月 筆名松島わき子）が掲載されることになるのである。（絵も自分で書きたいと申し出たが、その時は認められず、ふくたしょうすけが担当している。）ここでも自作を持ち込むという行動を起こしたことで、また一步絵本を出すという夢に近づくことになった。

これを契機に、わきこは「母の友」に童話を掲載するようになる。1か月に2度ほどは原稿を持って編集部を訪ねるが、「編集の人が厳しくてね、だめなときは原稿を放り出されて無視されるの。悔しくて、こんどは絶対面白いものを書いてやるってがんばったの」と述べている。また、

ほかの人の絵本を読んで、小さい子の話、幼稚園の話なんか書けたらいいなと思って、書いたことがあるんです。でも編集部には、「誰かの真似をしちゃいけません」と返されましたね。「あなたにはあなたの言葉がある」と。自分の生活や、生き方そのものが、自分の言葉となる。私は「母の友」で、自分の言葉で書くということを学んだと思います。（注21）

と、自身の中から出てくる借り物でない言葉をつづることの大切さに気付く。こうした試行錯誤の中から、落語のようなオチのあるユーモラスな話が評価され、やがてわきこの絵本の個性ともなっていく。幼いころから宮沢賢治などの本や落語に親しみ、高校時代から童話創作を続けていたわきこの力を水口氏は見出し、その個性を創作の中に引き出したのであった。

挿絵や童話の仕事が入ってくるようになったことで、経済的自立への自信を持ち始めていたわきこは、創作に集中したいという思いがあり離婚を決意する。当時、女性が結婚生活を捨てて自立するということは珍しいことであった。ちょうどこのころ書かれたのが童話『せんたくかあちゃん』であり、昭和45年「母の友」8月号にカラーページで掲載された。

何を書こうかと考えたとき、まず浮かんだのがたくましい女の人の話でした。それが「せんたくかあちゃん」です。(略)

当時、女の人はつつましくて人のいうことをよく聞くというのが一般的なイメージでしたが、「女だって、たくましいんだから」という反発心が私の中にありましたし、そういう人になりたいとも思っていました。(注 22)

私は、たくましい女性とは自分の母親のような人だと思っていました。母は父の死後、働き始めましたが、当時は、年を取った女の人に仕事なんて何もなかったんですよ。私は母の姿を見て、何でこんなに苦勞をするんだろうと思っていました。だから二十代のころの私は、女の人は男の人に寄り掛かって生きているようではだめだと思っていたの。手に職をつけて、独立の姿勢がなければいけないと。これを描いた時期は、特にその気持ちが強かったように思いますね。(注 23)

などと述べている。当時の一般的な女性像に甘んじることなく、男性に依存せず自立して生きていくための強さをわきこは求めており、女性のたくましさをもった「せんたくかあちゃん」を描いたのであった。

こうして掲載された童話『せんたくかあちゃん』には、読者から大きな反響があったという。わきこは絵本の形でこの作品を出したいという思いが強かった。しかし、なかなか福音館から OK が出ず、そのうち他のいくつかの出版社から打診を受けた。これに押される形で福音館が出版を決め、絵本として「こどものとも」に掲載されることになったのである。わきこの念願がようやくかなったのは 8 年後の 1978 年であり、大変うれしかったと述べている。

1973 年、法政大学教授で心理学者の乾孝に監修してもらい、初めての絵本〈ことばとかずシリーズ〉『わっこおばちゃんのおと 2 のえほん』『わっこおばちゃんのと 5 のえほん』(いかだ社)が出版される。さらに、翌年出された『小さなわらわばなし』(こずえ)は、江戸小咄からとった短い話を集めたもので、落語のもとになったさまざまな話を子ども向けに書き直して紹介したものであった。(注 24) この作業を通して、わきこはさらに自身の創作に多くの着想を得た

のではない。雨の日におつかいを母親から命じられた子どもがさんざんごねて、準備を万端に整えて出発しようとするすでに晴れていたという『おつかい』（福音館書店 1974・5）や、なかなか起きないねこを大砲まで打って起こそうとしたいぬが、やっと起きたねこに言った言葉が「おやすみ」であったという『ねえ、おきて!』（ポプラ社 1975・8）など、落語的なおちのある絵本が出されている。

「ばばばあちゃん」の名前が最初に登場したのは、1977年12月「母の友」に掲載された童話『ババばあちゃんのはなくすてきないすくねこのぼうし』である。この不思議な名前についてわきこは、

宮沢賢治の言葉の使い方が好きで…繰り返しの言葉がとても多いんですね。普段使っていないような感じの音を使って、その表現にぴったりの言葉を作るから、すごいんですね。一生懸命考えて、“おばあさん”“ばあちゃん”とかいろいろ口で言っているうちに、ば・ば……ってこうなっちゃったのね。だから口で唱えていい感じだと思ってつけちゃったから、意図とか意味はないよ。^(注25)

と説明している。幼い頃から言葉の楽しい響きに親しんだわきこならではの命名と言えよう。

さらに、短編を連ねる形で童話『ばあちゃんのゆりいすばなし』が11回まで連載される（1978年4月～9月）。この中の話をもととして、絵本「ばばばあちゃん」シリーズの『すいかのたね』や『どろんこおそうじ』などが生まれることになる。わきこは、「ばばばあちゃん」について次のように語っている。

「ばばばあちゃん」は行動的で、いつも前向き。トラブルが起こってもそれをふっとばし、思いがけないやり方で楽しんでしまう力強さがあります。私はこういう女の人が大好き。きっと私の中に「ばばばあちゃん的なもの」があって、それを表現したいからでしょうね。^(注26)

幼い頃から不如意な思いや色々な困難を味わったわきこであったが、そうした体験を乗り越える強さも養われたという。そしてわきこの中に「ばばばあ

ゃん的なもの」が育っていったのであり、それが作品の中に開花したのであった。

『ばあちゃんのゆりいすばなし』を連載していた頃は町田に住んでいたが、その後、母親と姉が練馬を離れて移り住んでいた神奈川県逗子市に転居した。わきこが福音館の編集者に連れられて長野県岡谷市を訪れることになったのはこの頃で、そのいきさつを以下のように語っている。

『風の又三郎』にある「すっぱいかりんも吹きとばせ」のカリンを見たことも食べたこともなかったの。するとある編集者が「僕がよく通っている家にあるから、連れてってやるよ」と、やってきたのが…今住むこの家（笑）。

(注 27)

すなわちのちに夫となる武井利喜の住む家であった。武井は以前福音館の図書室でアルバイトをしており、それが縁でこの編集者と知り合いであった。武井はヨーロッパの古い絵本を蒐集しており、わきこはそれを見せてもらってすばらしいと思ったという。また「リンゴ畑が広がり、ホテルの舞う田園風景を眺めていると、気持ちが安らいでいきました」(注 28)と述べている。これを機に、何度か逗子と長野を往復するうち、1981年に武井利喜と結婚、長野県に移り住むこととなった。以後「ばばばあちゃん」シリーズをはじめ、多くの絵本をこの地から生み出していくことになる。さらには、1990年から「小さな絵本美術館」の活動も加わり、わきこの人生はまた新しい展開を見せるのである。

< 注 >

注1 「こんにちは 絵本作家さん さとうわきこさん」(菅原千賀子取材・文『この本読んで!』2013年夏第47号 出版文化産業振興財団)

注2 新潮社の『世界名作選』は、昭和11年に作家山本有三のもとで企画・編集された子ども向けの作品集である。美智子妃が戦時中に疎開先で愛読され、2002年国際児童図書評議会50周年記念大会の開会祝辞の

中で触れられたことでも知られる。ケストナーなどの物語、童話や詩、さらにはアインシュタイン博士が日本の子供に宛てた手紙など、良質な文章で書かれた作品が幅広く収録されている。

- 注 3 注 1 に同じ
- 注 4 引用は、新潮文庫『日本少国民文庫世界名作選 (1)』(平 15.1) による。
- 注 5 「丘を越えて家に来た人」(「カノラホールソサエティ」vol.148 2014 岡谷市文化会館カノラホール)
- 注 6 「牧歌的な風景への憧れは、いつも心にありましたね。それは大泉学園での自然に恵まれた環境、そして大好きな詩『牧場』から深く影響を受けていたのかもしれませんが。」(注 1 に同じ) とわきこはのちに語っている。
- 注 7 「ばばあちゃん(主役を語ろう 作者たちに聞く) さとうわきこさん」(大平佐知子構成・文「朝日新聞」2001・1・25 夕刊)
- 注 8 植物学者牧野富太郎は、武蔵野の野趣豊かなこの地に、大正 15 年に居を移した。わきこは牧野に会ったことがあり、飼っていたスピッツが子犬を生んだので牧野にあげたエピソードを講演(2013・7・6「絵本作りのもとをたのしむ」飯田中央図書館)で語っている。
- 注 9 「たくましく自立した女性像を さとうわきこ」(『絵本作家のアトリエ 3』2014 福音館書店)
- 注 10 注 8 の講演会での発言
- 注 11 「絵本作家訪問記 さとうわきこさん」(「母の友」1996.4 福音館書店)
- 注 12 「インタビュー絵本作家さとうわきこさん」(取材、構成 今溝恵子「カノラホールソサエティ」NO.104 2007 岡谷市文化会館カノラホール)
- 注 13 「文章を書いたり絵を描いたりすることに苦勞を感じたことはなかった」と述べており、わきこにとっては絵や童話を書くことは自然なことであったようである。「絵も苦勞なく描いて、展覧会なので度々入賞した」(「インタビュー/書く人/描く人 さとうきわこさん」「こ

どもの本」**1989. 11** 日本児童出版協会) と述べている。

- 注 14 構成専攻では、造形の基礎としての構成理論・色彩・形態テクスチャ・色光などについての実験研究、写真・印刷などによる新しい造形の可能性の追究を行っていた。
- 注 15 注 9 に同じ
- 注 16 注 8 の講演会で「病気がちだったことで、何でも挑戦しようと思って実行することが多かった」と述べている。
- 注 17 注 9 に同じ
- 注 18 「『ばばばあちゃん』の作者、さとうわきこさんのアトリエを訪ねました」(「MOE」**2007・3** 白泉社)
- 注 19 注 1 に同じ
- 注 20 注 11 に同じ
- 注 21 「わたしの『母の友』時代 さとうわきこさん」(「母の友」**2013・9** 福音館書店)
- 注 22 注 21 に同じ
- 注 24 注 9 に同じ
- 注 25 絵は絵本『とりかえっこ』(1978年ポプラ社 第1回絵本にっぽん賞、全国学校図書館協議会第27回「よい絵本」に選定)でも組んだ、二俣英五郎が担当している。
- 注 25 注 11 に同じ
- 注 26 注 7 に同じ
- 注 27・28 注 1 に同じ

※インタビューにあたり、さとうわきこ氏をはじめ、小さな絵本美術館館長 武井利喜氏、スタッフの竹山さん 小川さんに大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

さとらわきこ作品一覧

『のはらのふゆ』 松島わきこ絵	1965	「チャイルドブックワールド」12月	チャイルド本社
『みんなのねがい』 松島わきこ絵 渡辺四郎写真	1966	「チャイルドブックワールド」1月	チャイルド本社
『うさぎのたんじょうび』 松島わきこ	1966	『保育の友』 8月	全国社会福祉協議会
『ハートの星の花』 寺村輝夫文 松島わきこ絵	1967		盛光社
『天使のトランプベットの』 A・シユミット著 熊倉美康訳 松島わきこ表紙・挿絵	1967		あかね書房
『ことりのゆうえんち』 松島わきこ絵 浜野栄次写真	1967	「チャイルドブックワールド」5月	チャイルド本社
『ねこのコックさん』 もりひさし文 まつしまわきこ絵	1967		野村トニー
『たべすぎきつね』 イソップ作 花岡大学文 松島わきこ挿絵	1968	『よくばりもの話』 所収	国際情報社
『まぼろしの魚のほね』 白木茂文 松島わきこ絵	1968	『母と子の世界の文豪童話シリーズ 第6巻 デイケンズ・ガルシン・ヘーベル』 所収	研秀出版
『てんぐのきせる』 松島わきこ作 ふくだしろうすけ絵	1968	「母の友」 9月	福音館書店
『小さいぬべりの日記』 田村まゆみ著 松島わきこ絵	1968	『わたしの小さなお話の本1』 所収	あかね書房
『かしパンのたび』 田村まゆみ著 松島わきこ絵	1968	『わたしの小さなお話の本2』 所収	あかね書房
『ライオンとねずみ』 鶴見正夫文 松島わきこ絵	1968	「チャイルドブックワールド」11月	チャイルド本社
『こぶたのうでどけい』 宇野克彦作 松島わきこ絵	1969		あかね書房
『ワニライオン』 松島わきこ	1969	「母の友」 2月	福音館書店
『ウサギ王子』 白木茂文 松島わきこ絵	1969	『母と子の世界の文豪童話シリーズ 第14巻 ショーロホフ・モーパッサン・ミルン・オルコット』 所収	研秀出版

『マッチウりのしょうじょ』（紙芝居）アンデルセン原作 川崎大治 脚本 松島わきこ画 青木さきみ展開指導	1969			童心社
『くいしんぼうなこっくさん』松島わきこ	1969	「母の友」	6月	福音館書店
『かわうそときつね』（紙芝居）堀尾青史作 松島わきこ画	1969			童心社
『アヒルがとけいをのんじやった』松島わきこ	1969	「母の友」	12月	福音館書店
『おしゃべりおなか』（この年以降 さとうわきこ）	1970	「母の友」	6月	福音館書店
『せんたくかあちゃん』	1970	「母の友」	8月	福音館書店
『しんしなんで』	1970	「母の友」	10月	福音館書店
『きつねがいえをみつけたわけ』	1971	「母の友」	3月	福音館書店
『はないっぱいになあれ』（紙芝居）松谷みよこ作 さとうわきこ画	1971			童心社
『ふん！くだらん！』	1971	「母の友」	11月	福音館書店
『さいごのばんさん』高橋さやか文 さとうわきこ画	1973			福音館書店
『わっこおぼちやんのてと5のえほん』乾孝監修	1973			いかだ社
『わっこおぼちやんのおと2のえほん』乾孝監修	1974			いかだ社
『おつかい』	1974	ペーパーバック絵本		
	1993	日本傑作絵本シリーズ ト1 ページ書き加えあり		福音館書店
『小さなわらいばなし 上巻』さとうわきこ文 二俣英五郎絵 松本新八郎協力	1974			こずえ
『小さなわらいばなし 下巻』さとうわきこ文 二俣英五郎絵 松本新八郎協力	1974			こずえ
『小さなわらいばなし1』さとうわきこ文 二俣英五郎絵 松本新八郎協力	1974			こずえ
	1976	改版		こずえ

『小さなわらいばなし2』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵 松本新八郎協力	1974			
	1976	改版		こずえ
『ねこのあかちゃん』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵	1974			いかだ社
『まいごのひよこ』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵	1974			いかだ社
『小さなわらいばなし3』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵	1975			こずえ
『小さなわらいばなし4』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵	1975			こずえ
『続小さなわらいばなし 上巻(3)』 さとうわきこ文 二俣英五郎 絵 松本新八郎協力	1975			こずえ
『続小さなわらいばなし 下巻(4)』 さとうわきこ文 二俣英五郎 絵 松本新八郎協力	1975			こずえ
『たぬきがいっぱい』	1975			フレール館
	1975			ポプラ社
『ねえ、おきて!』	1995		ポプラ社のものに3ページ カットを追加	架空社
『「モー」ってないただあれ?』	1975		「母の友」8月	福音館書店
『とりかえっこ』(イラスト)	1975		「母の友」9月	福音館書店
『ねこねずみのおつきあい』(イラスト)	1975		「子どもの館」9月	福音館書店
『おかあさんのほん』 さとうわきこ絵 西内ミナミ協力	1975			偕成社
『ねえ、まだねてるの!』	1976			ポプラ社
	1996			架空社
『五つのスケッチ』(「オレンジいろのでんわ」「カエルとたにし」 「むしば天狗」「ぞうき林のよる」「おじいの小屋」)	1976		「子どもの館」8月	福音館書店
『ちいさいねずみ』	1976		「母の友」10月	福音館書店

『おりょうりとうさん』	1976		フレール館
『スープになるはなし』	1977	「子どもの館」2月	福音館書店
『こぎつねのたんじょうび』（紙芝居）篠塚かをり脚本 さとうわきこ画 片野枝美子展開指導	1977		童心社
『ねずみのなるき』	1977		こずえ
	2001		フレール館
『べろべろばあ』	1977		こずえ
	2001		フレール館
『おつきあい』	1977		こずえ
『パパばあちゃんのはなし<すてきなす><ねこのぼうし>』	1977	「母の友」12月	福音館書店
『ばあちゃんゆりいすばなし（一）いいにおい（二）おつかい』	1978	「母の友」4月	福音館書店
『ばあちゃんゆりいすばなし（三）けいとづくり（四）よる』	1978	「母の友」5月	福音館書店
『ばあちゃんゆりいすばなし（五）くろいたね（六）雨ふり』	1978	「母の友」6月	福音館書店
『とりかえっこ』さとうわきこ文 二俣英五郎絵	1978	「母の友」（1975・9）に掲載のものを もとに絵を二俣が担当し創作	ポプラ社
『ばあちゃんゆりいすばなし（七）さかなつり（八）ぼうし』	1978	「母の友」7月	福音館書店
『ふうせんあげる』	1978	「1年の学習／かがく・読み物 特集」	学習研究社
『せんたくかあちやん』	1978	「こどものとも」8月	福音館書店
	1982	こどものとも傑作集	
『ばあちゃんゆりいすばなし（九）れいぞうこ（十）おふろ』	1978	「母の友」8月	福音館書店
『ばあちゃんゆりいすばなし（十一）おそうじ（十二）よるのさんぽ』	1978	「母の友」9月	福音館書店

『ちよっといれて』	1978		1978		偕成社
『くーちゃんおやすみ』村山桂子文 さとうわきこ絵	1987	改訂版 (1978年のものを大判化)			チャイルド本社
『まゆこのるすばん』征矢清文 さとうわきこ絵	1978				あかね書房
『るすばんばんするかいしゃ』寺村輝夫文 さとうわきこ絵	1979				学習研究社
『いそがしいよる』	1979	「母の友」7月			福音館書店
『あらってあげる』	1979				フレーベル館
『パパばあちゃんのはなし ニャータのぼうし』さとうわきこ作 わかやましずこ絵	1979				ポプラ社
『くまのくまた』	1979				フレーベル館
『まつくろけ』川崎洋文 さとうわきこ絵	1979	「年少版・こどものとも」11月			福音館書店
『ちいさいねずみ』	1980				偕成社
『よくばりすぎたねこ』	1980				PHP 研究所
『とんとんと ひとむーむー』村山桂子文 さとうわきこ絵	1980				ひさかたチャイルド
『くいしんぼおうかみ』	1980	「母の友」9月			福音館書店
『サンドイッチつくろう』	1980	「かがくのとも」12月			福音館書店
『わらったぞう』寺村輝夫文 さとうわきこ絵	1993	かがくのとも傑作集			福音館書店
『なかよし』	1981				小学館
『小さなわらいばなし 上』ポプラ社文庫 A92	1981				PHP 研究所
『小さなわらいばなし 下』ポプラ社文庫 A93	1981	1974年の『小さなわらいばなし』 の1, 2をまとめたもの (こずえ)			ポプラ社
	1981	1975年の『小さなわらいばなし』 の3, 4をまとめたもの (こずえ)			ポプラ社

『いそがしいよる』	1981	「普及版こどものとも」 9月	福音館書店
	2008	こどものとも傑作集	
『ばあちゃんゆりいすばなし おふろはあとで』	1981	「母の友」 9月	福音館書店
『すいかのたね』	1982	「普及版こどものとも」 7月	福音館書店
	1987	こどものとも傑作集	
『ねないこだあれ』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1982		講談社
『おおかさんのおい』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1982		講談社
『ふうちゃんうみへいく』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1982		講談社
『くいねこのたまご』	1982		小学館
『きのいいサント』	1982	「母の友」 12月	福音館書店
『もしもしとんとん』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1983		講談社
『ふうちゃんのしつぽ』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1983		講談社
『ふうちゃんみてごらん』 松谷みよ子文 さとうわきこ絵	1983		講談社
『またよくばりすぎたねこ』	1983		PHP 研究所
『ひよこのもと』	1983	「母の友」 11月	福音館書店
『きのいいサント』	1983	「母の友」(1982・12)に掲載 のものをもとにあらたに創作	金の星社
『あめふり』	1984	「こどものとも」 5月	福音館書店
	1987	こどものとも傑作集	
『たぬきがつくったへんな海』	1984		ポプラ社
『たぬきの海』	1984	「母の友」 8月	福音館書店
『ちっちゃんひよこちゃん なにならうかな』	1984		講談社
『ちっちゃんひよこちゃん おもしろいこと』	1984		講談社

『ちっちゃなひよこちゃん ひよこのもと』	1984		講談社
『きゅうかんちようのかんこちゃん』西内ミナミ文 さとうわきこ絵	1985		ひかりのくに
『ちいさいねずみ』	1985	『かえるのびよん』所収	国土社
『すえっこねこのルウ』	1985		教育画劇
『うちゅうからきたこぎつね』 沖井千代子文 さとうわきこ絵	1985		ひくまの出版
『まちへいったきつねどん』	1985		フレール館
『どうしてないてるの?』 さとうわきこ文 石倉欣二絵	1985		ポプラ社
『ちっちゃなひよこちゃん かくれんぼ』	1985		講談社
『どろんこおそうじ』	1986	「こどものとも」5月	福音館書店
『ぼく そらをさわってみたいんだ』 さとうわきこ文 岩井田治行絵	1990	こどものとも 傑作集	
『いたずらふうせんモブセ』 グンネル＝リンデ作 木村由利子文 さとうわきこ絵	1986		ポプラ社
『こねこのポシェ』	1986	「母の友」9月	福音館書店
『よもぎだんご』	1987	「かがくのとも」3月	福音館書店
『てじな』	1989	かがくのとも傑作集	チャイルド本社
『こぐまのエンデ みんなでドボーン』 さとうわきこ文 岩井田治行絵	1987		ポプラ社
『たいへんなひるね』	1988	「こどものとも」4月	福音館書店
『このねこ かってもいい?』 大石真文 さとうわきこ絵	1990	こどものとも 傑作集	福音館書店
『ころころまるパン』 松谷さやか文 さとうわきこ絵	1988		教育画劇
『ころころまるパン』 松谷さやか文 さとうわきこ絵	1989	『ころころまるパン・マーシャとくま・やぎのブルーセ』所収	講談社

『もりのたなばた』	1989		1989	学習研究社
『わっこおばちゃんのとりにありそび』 本多慶子協力	1989		1989	童心社
『おっちゃん』	1989		1989	福音館書店
『そりあそび』	1990		1990	福音館書店
	1994		1994	福音館書店
『かみさまになりそねたサンダル』 君島久子文 さとうわきこ絵	1990		1990	講談社
	1990		1990	講談社
『火うちばこ』 舟崎克彦文 さとうわきこ絵	1990		1990	小学館
	1990		1990	小学館
『しごとのとりにかえっこ』 山内清子文 さとうわきこ絵	1990		1990	講談社
	1990		1990	講談社
『ばばあちゃんのくいしんぼうカルタ』	1990		1990	福音館書店
	1991		1991	福音館書店
『やまのほり』	1994		1994	福音館書店
	1991		1991	文研出版
『そんなたくんのはなし』	1991		1991	福音館書店
	1991		1991	福音館書店
『ばばあちゃんからおたんじょうびおめでとう』	1992		1992	PHP 研究所
	1992		1992	福音館書店
『まあちゃんの日』 (まんが)	1992		1992	福音館書店
	1992		1992	福音館書店
『わたしの初夢』 (イラスト)	1994		1994	フレーベル館
	1994		1994	フレーベル館
『なんだかんだ』 さとうわきこ文 せがわやすお絵	1994		1994	福音館書店
	1997		1997	福音館書店

『るすばん』	1995		福音館書店
『あひるのたまご』	1995	「こどものとも」4月	福音館書店
	1997	こどものとも 傑作集	
『はうら かめだ』 さとうわきこ文 せがわやすお絵	1995	「年少版・こどものとも」5月	福音館書店
	1997	日本傑作絵本シリーズ	
『ばばあちゃんのアイスパーティー』	1995	「かがくのとも」8月	福音館書店
	1998	かがくのとも傑作集	
『おもしろとうさん』	1996		フレール館
『おーいおーい』	1996	「こどものとも」2月	福音館書店
	1998	「0.1.2 えほん」	
『ばばあちゃんのおもちつき』	1997	「かがくのとも」1月	福音館書店
	1998	かがくのとも傑作集	
『ないたあかおに』（紙芝居）浜田廣介原作 堀尾青史脚本 さとうわきこ画	1997		童心社
	1997		福音館書店
『なにしてるんだ』 さとうわきこ文 瀬川康男絵	1997		福音館書店
	1997		福音館書店
『ばばあちゃんのマフラー』	1997		福音館書店
『ばばあちゃんのぼうけんすごろく』	1997	「こどものとも」500号記念11月増刊号	福音館書店
	2000		
『ことりのうち』	1998	「こどものとも」4月	福音館書店
	2006	こどものとも傑作集	
『ばばあちゃんのやきいもたいかい』	1998	「かがくのとも」12月	福音館書店
	2000	かがくのとも傑作集	
『ねずみのはなし』	1999		フレール館
『おさんぽいくよ』	2000	「こどものとも0.1.2」3月	福音館書店
『るんぶんぶん』 ハンス・フィッシャー作・絵 さとうわきこ訳	2000		架空社

『ばばあちゃんのなぞなぞりょうりえほんーむしばんのまき』	2000	「かがくのとも」 12月	福音館書店
『ケーキができたわけ』	2004	かがくのとも傑作集	女子パウロ会
『くもりのちはれせんたくかあちゃん』	2002	「こどものとも」 4月	福音館書店
『しんぶんとだんす』	2006	こどものとも傑作集	福音館書店
『だいすきとうさん』	2002	「ちいさなかがくのとも」 11月	福音館書店
『ばばあちゃん 絵はがきの本』(絵はがき)	2003		フレーザー館
『ばばあちゃんとおべんとうつろろう』さとうわかき文 佐々木志乃協力	2004		福音館書店
『ばばあちゃん3じのおやつコンテスト審査結果発表』	2004	「かがくのとも」 4月	福音館書店
『あらしなんてへっちゃら』	2004	「母の友」 6月	福音館書店
『ばばあちゃんのなんでもおこのみやき』	2005	「ちいさなかがくのとも」 10月	福音館書店
『こんにちは おてがみです』(共著)	2005	「かがくのとも」 12月	福音館書店
『うみのおまつりどんどんぞせ』	2009	かがくのとも傑作集	福音館書店
『ねずみのすもう』 さとうわかき絵	2006		福音館書店
『なんにもせんにな』(大型紙芝居) 巖谷小波原作 川崎大治脚本 さとうわかき絵	2006	「こどものとも」 8月	福音館書店
『ばいばいまたね』	2012	ばばあちゃんの絵本	チャイルド本社
『火うちばこ』舟崎克彦文 さとうわかき絵	2007		童心社
『ばばあちゃんのかんてんりょうり』	2007		金の星社
『さよならはくちょう』	2007		小学館
	2008	「かがくのとも」 2月	福音館書店
	2009	「ちいさなかがくのとも」 3月	福音館書店

『いたずらもの グリム童話より』ハンス・フィッシャー絵 さとうわきこ訳	2009		小さな絵本美術館
『ばばあちゃん パズル』(『たいへんなひるね』の一場面)	2009		福音館書店
『のいちごつみーばばあちゃんのおはなし』	2010	「こどものとも」4月	福音館書店
『ばばあちゃんクリスマスカざり』	2010	「かがくのとも」12月	福音館書店
『あめのちゆうややせんたくかあちゃん』	2013	「こどものとも」4月	福音館書店
『こんにちは またお手紙です』(共著)	2014		福音館書店
『まいごのぞう』 さとうわきこ文 二俣英五郎絵	不明	モンモンライブラリー3歳コース・10	毎日新聞社

インタビューほか参考文献

インタビュー / 書く人 / 描く人 / さとうわきこさん 夢はりんご園の中の美術館	1989	「こどもの本」	日本児童図書出版協会
絵本作家訪問記 さとうわきこさん 読者記者 小山夕恵子	1996	「母の友」4月	福音館書店
さとうわきこ 講演会資料	1998	「児童文学・絵本作家シリーズ：12」	O. L. V (大阪中央図書館ボランティアグループ)
父親・ホフマンの思い出 (聞き手 さとうわきこ)	1999	「母の友」2月	福音館書店
ばばあちゃん (主役を語ろう 作者たちに聞く) さとうわきこさん 構成・文 / 大平佐知子	2001	「朝日新聞」1/25 夕刊	朝日新聞社
インタビュー 好きなものを見せたいー「小さな絵本美術館」の活動 聞き手 広松由希子	2004	「Bookend」	絵本学会
人気絵本と美術館を訪ねて ばばあちゃんと小さな絵本美術館	2007	「MOE」4月号	白泉社
絵本作家のアトリエ さとうわきこさん	2007	「母の友」7月	福音館書店

インタビュー 絵本作家 さとうわきこさん 取材・構成 今溝恵子	2007	「カノラホールソサエテエ」 No.104	岡谷文化会館 カノラホール
こんにちは。絵本作家さん さとうわきこさん 私をみちびいたもの 取材・文/菅原千賀子	2013	「この本読んで！」2013 夏第 47号	出版文化産業振 興財団
わたしの「母の友」時代	2013	「母の友」9月	福音館書店
たくましく自立した女性像を さとうわきこ(2007年「母の友」 7月号掲載のもの)	2014	『絵本作家のアトリエ3』	福音館書店
絵本「いそがしいよる」ができたころ～宮澤賢治への思い～	2014	「カノラホールソサエテエ」 vol.146	岡谷市文化会館 カノラホール
フェリクス・ホフマンの絵本	2014	「カノラホールソサエテエ」 vol.147	岡谷市文化会館 カノラホール
丘を越えて家に来た人	2014	「カノラホールソサエテエ」 vol.148	岡谷市文化会館 カノラホール
『こねこのびっち』の作者	2014	「カノラホールソサエテエ」 vol.149	岡谷市文化会館 カノラホール

*「さとうわきこ講演会資料」(1998 OLV)を一部参照した

*著者名の表記にはいくつかあるが、さとうわきこ 松島わきこ に統一した

*視聴覚資料や図録、海外版は除外した

*作成には信州豊南短期大学言語コミュニケーション学科2013年度司書ゼミ生 中村百合乃・吉沢知恵・宮下明香りの協力を得た